

## トピックス

# 郵政博物館誕生115年記念 「一通信のあゆみ—悠久の大通信」展

田原 啓祐

## ① 「一通信のあゆみ—悠久の大通信」展開催について

郵政博物館の起源は、明治32（1899）年、逓信省内に設置された「参考品室」まで遡る。その後、明治35（1902）年6月20日、「万国郵便連合加盟25周年」の記念展覧会の際に初めて「郵便博物館」の名称で収蔵品が一般公開され、公の博物館としての一歩を踏み出した。

現在の郵政博物館では、明治の郵便制度創業以降から郵政民営化までの郵便関係資料を中心とした、郵政と通信に関する約400点の資料と約33万種の世界の切手を常設展示しているが、そのほかにも、古代から郵便創業以前までの駅通資料—東大寺文書や固関木契をはじめ飛脚印や飛脚状、江戸幕府道中奉行所から伝わる「五街道分間延絵図」等、通信や街道に関する資料も多く収蔵しているほか、ペリーが幕府に献上した「エンボッシング・モールス電信機」（重要文化財）等、わが国の電気通信史の黎明を伝える貴重な資料等も収蔵しており、博物館として、これらの貴重資料を次世代に繋いでいくことを使命として様々な活動を行っている。

2017年は郵政博物館の誕生115周年に当たり、当館ではこれを記念して、古代から江戸時代までの収蔵資料を紹介する「一通信のあゆみ—悠久の大通信」展（期間：2017年4月15日（土）～6月25日（日））を開催した。

## ② 主な展示品の紹介

同展では、展示を3つの章（Ⅰ．いにしへの通信と街道、Ⅱ．江戸の通信と街道、Ⅲ．電気通信のあけぼの）に分けて行った。以下、各時代を代表する主な資料を紹介したい。

### (1) いにしへの通信（古代から戦国時代）

古来より、人はさまざまな方法でお互いの意思を伝えていた。近距離の場合は、身振り手振りや言語で、遠距離の場合は音や煙などを利用して互いに連絡を取り合っていた。

日本では大化の改新後、天皇を中心とする集権国家を目指し、唐の律令制を範とする国家の建設が始まった。各地に駅を設けそこに馬を配備し公用の文書を馬に乗り継いで送る「駅制」が整備され、中央と地方の連絡のための通信制度が開始された（図1）。

平安時代に入ると、人が走って書状を運ぶ「脚力」や馬による特急の「飛脚使」も創設された。「駅制」は平安時代後期に衰退するが、鎌倉時代に「駅路の制」が設けられ、宿に人夫や馬を置き、早馬（騎馬飛脚）や飛脚（人による徒歩での通信連絡者）を走らせた（図2）。

戦国時代になると、幕府が設置した通信制度は廃れ、戦国大名が勢力範囲内で独自の伝馬制度を設け、公用で馬を使用する者に「伝馬手形」を渡し、公用の書状や物資の運搬を行わせた（図3）。



図1 固関木契(贈 美濃国 駅伝) 寛文3(1663)年

固関木契は、古代、都の防備のため置かれた関所において、国の有事(天皇崩御、譲位、内乱など)に関所を封鎖する固関の際、使者である固関使が正当であることの確認に用いられた木製の割符のことである。これは、後西天皇が皇太子に譲位の際、古式に則って作成させ、美濃に贈ったものである。



図2 早馬の図 中村洗石画

早馬とは騎馬飛脚のこと。急使が首から胸に文書袋をさげて疾走し、従者が馬柄杓を肩に後から走っていく様子が描かれている。



図3 丸子宿伝馬之事(今川氏伝馬文書) 永禄3年4月24日(1560年5月29日)

今川氏真が駿河国丸子宿へ出した伝馬の定めに関する朱印状。丸子宿に関する伝馬賃銭について指示を出している。



## (2) 江戸の通信と街道

戦国の世が終わり、世の中が安定してくると、街道が整えられ、人々の往来も次第に盛んになってきた。さらに商業の発達により、庶民の中にも遠隔地へ書状を出す者が増えてきた。

江戸の日本橋を基点に延びる「東海道」「中山道」「日光街道」「奥州街道」「甲州街道」の五つの陸上幹線道を「五街道」と呼び、幕府の直轄として道中奉行所の管轄下に置かれた。街道沿いには宿駅が設けられ、人馬継立、宿泊施設、書状や物資の運搬業務を担った。



図4 日光御山内見取絵図控 中禅寺 全 寛政12(1800)年～文化3(1806)年

日光山内とは日光の中心地で、江戸時代は東照宮、大猷院(三代将軍家光の廟所)および中世以来の社寺境内地をいう。江戸幕府の道中奉行所が精密な測量や調査をした上で作成したもので、道中絵図として信頼のおけるものである。

「五街道分間延絵図」は、江戸幕府道中奉行所による五街道と主要な脇街道の調査に基づき、実測の1800分の1の縮尺で制作された彩色絵図で、寛政12(1800)年から文化3(1806)年にかけて完成した。3部作成され、うち1部は将軍に献上され、残る2部は実務用として道中奉行所に置かれた。

現在は郵政博物館と東京国立博物館に1部ずつ残っており、郵政博物館収蔵のものは折本仕立てで92冊あり、道中奉行所より伝わったものとされている。東京国立博物館所蔵のものは、江戸城内紅葉山文庫に収められていたものと思われ、こちらは80巻の卷子仕立てとなっており、国の重要文化財に指定されている。

図4は、当館収蔵の「五街道分間延絵図」のうちの1冊、「日光御山内見取絵図控」である。

幕府公用の書状や物資は、「継飛脚」によって街道の宿駅制度を利用して運ばれた。宿駅の間屋場では継飛脚専用の人足を常駐させていた。継飛脚は通常二人



図5 富士百撰 暁の不二(模刻彩色) 葛飾北斎

夜明け時、富士山を背に状箱をかついで走る継飛脚(江戸時代の幕府公用の飛脚)の様子が描かれている。継飛脚は道中を二人が連行してリレー式に公用文書や書状を送達した。

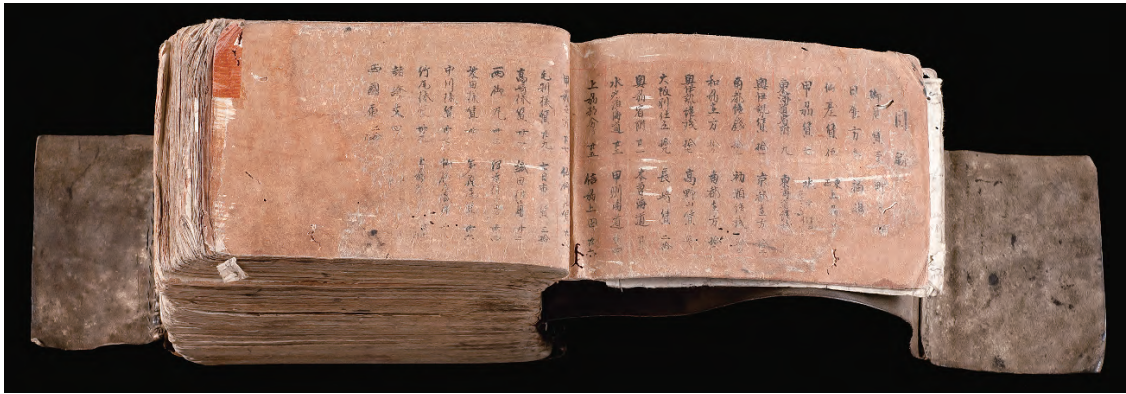


図6 大細見 文化2（1805）年

飛脚問屋京屋弥兵衛が文化2（1805）年から幕末まで使用していた飛脚問屋の基本台帳。各地宛ての書状料金、宿屋の名称、受持ち町名などが記載されている。

一組となり、一人が状箱を担ぎ、一人が添人として昼夜を問わず、宿場から宿場へリレー式に書状を送った（図5）。

飛脚には、「継飛脚」のほか、大名が国許と江戸屋敷との連絡のために設けた「大名飛脚」や、民間の飛脚である「町飛脚」などがあった（図6）。

### (3) 電気通信のあけぼの

我が国の電気通信史の黎明は、米国遣日使節ペリーによってもたらされた。

アメリカ人サミュエル・モールスによって電気の断続により符号の送受信を行う電信機が発明され、ワシントン—ボルティモア間で電信が開通されたのは1844年のことであった。その10年後の安政元（1854）年、日米和親条約締結のために前年に引き続き来航したペリー提督が、米大統領ミラード・フィルモアから将軍徳川家定への贈呈品として持参したのが、エンボッシング・モールス電信機であった（図7）。



図7 ペリー将来 エンボッシング・モールス電信機 嘉永7（1854）年  
米国製 重要文化財

アメリカの使節ペリーが黒船とともに再来した際に日本に初めてもたらされた電信機である。エンボスとは英語で浮き彫りにするという意味で、送信側の電信機上の電鍵でモールス符号を打つと、受信側の電信機の紙テープにエンボス（凹凸の傷がつく）されて、信号を送ることができるようになっている。

本企画展では、上記のモールス電信機をはじめ、平賀源内の「エレキテル」、日本の電信事業創始時に初めて使用された「ブレゲ指字電信機」など、貴重な資料も展示、紹介した。

（たはら けいすけ 郵政博物館 主任資料研究員）